

# 欧州体育教育の目的と展開

— スポーツ教育学から得られるもの —

富 本 靖

Aims and Development of Physical Education in Europe  
—What We Should Learn from Recent Sport Pedagogy—

Yasushi Tomimoto

## Abstract

The author reviews the history and the status quo of European and American physical education and explains that Japanese modern physical education has its origin in Herbert Spencer's *Education; Intellectual, Moral, and Physical* (1860). The author also discusses several problems in Japanese physical education that contradict the stated goals of the program, and explores measures teachers should take to resolve these contradictions.

The problems are as follows. First, children have very few opportunities to learn the rules and histories of sports, though schools introduce a variety of sports into their curriculums. They put too much emphasis on moving the body. Second, since physical education is driven by competitive, results-oriented curriculums in which children do not have many chances to receive individualized instruction that matches each child's ability, physically less able children fall behind and give up, and therefore they are alienated from their teammates. This is not conducive to building team spirit. There have been attempts to address this by deemphasizing rankings and prizes, but this can nullify feelings of achievement.

The author concludes that European and American styles of physical education which allow children more freedom to enjoy sports are more effective for nourishing children's all-round personality, and also strongly suggests that adopting "sport pedagogy," a comprehensive science born in recent years, will solve these problems.

*Key words:* *physical education* (体育教育), *sport pedagogy* (スポーツ教育学), *history of sports* (スポーツの歴史), *all-round personality* (全人教育), *competitive, results-oriented curriculums* (競争, 結果重視のカリキュラム), *sports culture* (スポーツ文化)

## はじめに

現在日本で行われている体育のほとんどが、「体を動かすこと」のみに焦点を当てている傾向がある。もちろん、運動技術の取得や体力づくりに「体を動かすこと」は必須である。いくら理論を学んでも、実際に体を動かす経験を通して体得するものは大きいからだ。多くのスポーツが体育教育に取り入れられているが、そのルールや歴史を学ぶ機会是非常に少ない。

さらに、身体能力の違った個人が、個別に技術取得などの指導を受ける機会はあまりない。器用で

身体能力の高い子どもは、全体を通じた大雑把な説明だけでも実践に移せるかもしれないが、身体能力の低い不器用な子どもは、自分がどのように体を動かせば教師の要求どおりのことができるのか、わからないままにカリキュラムが進んでしまう。そこで実技テストがあり、それがうまくいかない、競争に勝てない、タイムがあがらないなどの経験をすることになる。また、競争至上主義や結果重視の度合いが強ければ強いほど、チームスポーツで足を引っ張る結果になり、チームワークどころか、チームに疎外されるきっかけを作ることにもなる。

このように、個人の身体能力に依存した達成主義の体育のカリキュラムは、体育の目標が達成できないどころか、全く逆の結果を与えてしまうのである。近年、運動会などで順位をつけない学校が増えている。これは、そういった「体育嫌い」の人たちが、かつて子どもだったときにこういったカリキュラムに大いに苦痛を感じ、反逆を起こしたためだと考えられる。

しかし、そのような平等主義は、他のことが苦手でも体育は得意、といった子どもの活躍の場を奪ってしまうことにもつながる。また、他の教科でも成績で順位が決まり、受験などではそれで人生の方向性まで決まってしまう。社会に出れば、常に競争が待っている。こういった実情を加味せずに、体育だけ平等主義というのはナンセンスであると考え。では、どうすればいいのか。

欧米での体育教育や、近年生まれた「スポーツ教育学」といった観点から、これらの諸問題をどう解決していったらいいのかを考察する。

## 第一章 欧州の体育教育の目的

### 第一節 体育教育の本当の目的

体育とは、「体」を「育む」と書く。体育教育とは、まさに「体を育み、育てる」教育のことだ。それは、「知育」「徳育」と並んで、教育の三本柱といえる。日本に「体育」という概念が持ち込まれたのは、イギリスの哲学者 ハーバート・スペンサーの『教育論』の三育主義によってである。ここでは、教育の3つの柱として「Mental training」「Religious training」「Physical training」を打ち出した。その後、「Mental training」は「Intellectual Education」に、「Religious training」は「Moral Education」に、「Physical training」は「Physical Education」に改良され、それを「知育」「徳育」「体育」と訳して、現在も尚、用いられているものである。「体育」と訳された Physical training の「Physical」であるが、これには「肉体の、肉欲の；荒っぽい、（スポーツが）激しい」<sup>1</sup> という意味があり、まさに肉体の教育、つまり体の教育「体育」なのである。

このように体育は、肉体を鍛えることそのものとしてスタートし、やがて「頑強な兵士を作る」という目的の下に、政治的に利用されていった。しかし現在、体育を「兵士の育成」と考える国は少なくなり、体育は各人の健康を維持し、心身ともに鍛えるという教育的意味合いを強く持つようになってきたのである。

日本の小学校の学習指導要領（平成10年12月告示、15年12月一部改正）では、「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」<sup>2</sup> ことを

1 三省堂 エクシード英和辞典

2 小学校学習指導要領 第2章 第9節 第1

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/990301b/990301j.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301b/990301j.htm)

体育の目標としている。

また、総則にも「学校における体育・健康に関する指導は、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする。特に、体力の向上及び心身の健康の保持増進に関する指導については、体育科の時間はもとより、特別活動などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うよう努めることとする」<sup>3</sup>とあることから、体育が単に一教科の枠を超え、「知育」「徳育（道徳教育）」と共に、子どもの発達成長に欠かせない全人教育としてのポジションを獲得していることがわかる。

さらに、総則では「家庭や地域社会との連携を図りながら、日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮しなければならない」<sup>4</sup>と続く。これらは、現在におけるドイツ、フランス、アメリカなど欧米諸国の体育教育の目的とほぼ一致する。

体育教育の目的とはすなわち、単なる身体能力や体力、技術の向上だけではなく、そのカリキュラムに導入されるスポーツなどを通じて心身の発達を促し、生涯を通じて健康な生活を送る礎として運動や健康的な生活への興味、思想、習慣を身につけることなのである。

しかし、日本と欧米の体育が、実際に重点を置いている部分はかなり違う。日本は、全員が一定レベルに達することが重視され、技術や身体能力の向上を目指して教育的指導をしているのに対し、欧米では、詳しくは後述するが、のびのびとスポーツを楽しむことによって体を動かすことの楽しみを知り、将来的な健康やスポーツへの動機付けを図っているのである。

## 第二節 体育教育に必要なカリキュラム

日本の体育のカリキュラムは、学習指導要領により学年別に細かく達成目標が定められている。1年生～2年生で学ぶ内容は、基本の運動（走・跳の運動遊び、力試しの運動遊び、器械・器具を使っての運動遊び、用具を操作する運動遊び、水遊び及び表現リズム遊び）とゲーム（ボールゲーム及び鬼遊び）となっているが、学年が上がるにつれて器械体操や表現運動、水泳、陸上運動などが加わっていく。これらを全員が一律にこなし、ある程度のレベルまで達成できることが望まれる。

授業は一斉に行い、例えばボールゲームや球技の導入時はキャッチボールから、などと、個々の子どもの技術や身体能力差を考慮せずに決められたカリキュラムを指導していくことが普通だ。これでは、技術や体力のある子どもは物足りなく感じ、それらが及ばない子どもであっても、ゲームに入る前に面白みを感じられなくなるだろう。

そして、その1つのプログラムが終了する前には、学級の子どもが全員見ている場所で実技テストを行い、体力や技術の到達度を成績に反映していく。できる子どもにとっては晴れ舞台ともいえる場面だが、できない子どもにとっては針のむしろである。できない子どもは、当然成績が悪い。そうしてますます体育に対して劣等感を抱き、体を動かすことに対して苦手意識を持つ。

これに対して、欧米の体育のカリキュラムは、選択制、少人数制などを導入していることが多い。年間を通じて、またはシーズン制で、自分の選択した種目のトレーニングを自発的に積んでいく。または少人数でゲームを楽しむ。

---

3 小学校学習指導要領 第1章 総則 第1 3

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/990301b/990301a.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301b/990301a.htm)

4 同注3

種目としては、バスケットボールやバレーボール、フットボール、サッカー、テニスなどの球技、器械体操や陸上競技、水泳、ダンス、ユニークなものは、ゴルフやフリスビー、障害物競走、フィットネス、スキーやスケートなども地域により、国によって授業に組み込まれているところもある。さらに、セルフ・ディフェンスや着衣水泳などの安全教育がなされているところもある。

基本的な運動技術、個人の技能の向上を促す活動よりも、ゲーム的・レクリエーション的な活動が多い。内容的にも日本のように細かく規定されておらず、多くの内容を詰め込んでいないようである。オーストラリアには、二重跳びすらできない体育教師のいる学校も存在している。<sup>5</sup>

教師はアドバイスはするが、強制はしない。成績のつけ方も、運動の技術や身体能力によるものではなく、出席率や授業に真面目に取り組んでいるかどうかで決まる。

このような海外の体育授業を受けた子どもたちの多くが、「日本と違って楽しかった」という感想を持っている。<sup>6</sup> もちろん、体育の授業以外に部活や地域のクラブチームに所属し、そこでスポーツの厳しさを経験している子どもが多いという、国全体におけるスポーツ環境の違いを無視するわけにはいかないだろう。しかしながら、学校体育の目的として、生涯を通じて体を動かすことへの興味や関心を持つことを挙げているなら、もっと楽しむことに主眼を置き、身体能力の高い子どもも低い子どもも、技術のある子どももない子どもも、その子なりに楽しみながら体を動かせるようなカリキュラムが必要なのではないかと考える。

### 第三節 スポーツ文化が体育教育にもたらしたもの

「スポーツ」という語の語源は、古代フランス語の「desporter」で「気晴らしをする」という意味であり、スポーツは本来、気晴らしや余暇を楽しむために存在したものであった。

体育にいち早くスポーツを取り入れたのは、イギリスである。大英帝国の時代、パブリックスクールでは、スポーツを通じた植民地支配のリーダーを育てていった。そこにあったのは、競争と達成という人間教育であった。しかし、スポーツを通じてリーダーシップやチームワークを学んだ一方で、リベラルさも息づいていた。

これらから学んだのが、他の欧米諸国である。フランスのクーベルタン(1863~1937)は、このようなイギリスのスポーツ教育に感銘を受け、自国の教育に持ち込もうと奔走した。それは、スポーツを通じた肉体的道徳的社会的教育であり、体育教育だけでなくそれまでのフランスの教育方法全般を変革しようとしたのであった。

また、ドイツで生まれた「自然体育」という概念は、「生徒たちが指示された運動を迅速かつ確実に学び、またそれによってクラスの目標を達成させるような」<sup>7</sup> ものではなく、子どもたちに「自発的に運動課題を解決」<sup>8</sup> させるべきであるということである。きちんと伸びた、角度のそろった指先を求めるのではなく、それぞれの子どもの能力や内発的な欲求にしたがって運動能力や技術を身につけていくことが大切だと述べている。

---

5 和田雅史『子どもが見た世界の体育授業』大修館書店 P. 89

6 同注5

7 オモーフ・グルーベ/ミハエル・クリューガー『スポーツと教育 ドイツ・スポーツ教育学への誘い』ベースボール・マガジン社 P. 133

8 同注7

アメリカで発生した「新体育」の考え方もまた、「子供の発育発達や社会的必要性に適合する、興味や満足を引き出しやすい自然な（もしくは自然に基づいた）運動」<sup>9</sup>であった。このように自然で自発的な運動に用いられるのに、スポーツは適していた。それまでの体操中心、身体の鍛錬中心の体育から脱却するのに一役買ったのが、スポーツだったのである。

フランスはもちろん、ドイツやアメリカにおいても、学生スポーツは「遊び」として導入されるはずだった。しかし、そこには落とし穴があった。学生によるアマチュアスポーツには、やがて勝利至上主義や商業主義がまわりついていく。これらによって、スポーツの教育的意義は薄れ始めた。それは、現在にも世界中で通じる問題である。

例えば日本では、昨年野球特待生の問題が騒がれたが、野球に限らずスポーツ特待生は多く認められる。これらは、私立学校が自校の名を上げ、生徒をたくさん集めるための手段として用いているものであり、学校経営や商業主義と密接な関係がある。

さらにスポーツは、政治にも利用されていく。つまり、頑強な肉体と強靱な精神を持つ兵士の育成である。第二次世界大戦の折に学校体育が軍隊教育の場に代わっていったのは、ドイツも日本と同様であった。もちろん、ドイツ占領下にあったフランスや、当時ソビエト連邦であったロシアでも起きている。これらは当然、戦後には多くの国で廃止されたものであるが、スポーツはその目的如何でダークな部分も備え持つ諸刃の剣であることがわかる。

しかしながら、そういった点に対して十分な配慮があれば、スポーツは体育教育に絶大な威力を発揮することもわかる。身体能力に個人差があっても、どんなに体力や技術に差があっても、同じくらいのレベルのメンバーが集まれば、自分のレベルで楽しく体を動かすことができる。チームワークやスポーツマンシップに則った公平さ、ルールの下での平等などを学び、汗を流して運動することの心地よさを心と体で感じ、ゲームの駆け引きや自分の動き方を考え、頭と体をフルに使うことを楽しみながら体得できる。まさに、頭も心も体も使う全人教育であり、癒しなのである。これらは、スポーツが導入される前のジムナスティックやトゥルネンのみが体育とされていた時代には得られなかった、スポーツの醍醐味である。

## 第二章 欧州各国での体育教育の考え方

### 第一節 ロシアの体育教育

旧ソビエト連邦の時代より、オリンピックやワールドカップなどのスポーツの世界大会の多くの種目で、ロシアは優勝あるいは上位入賞をはたしてきている。それはロシアに限らず、東欧の元社会主義国の多くがスポーツ大会において華々しい成績を残してきた。

このことを考えると、旧ソ連をはじめとする社会主義国では学校体育にもかなり重点を置いてきたように思えるが、実はそうではない。旧ソ連がはじめて学校体育の改革を行ったのは1985年であり、わずか30年弱前のことだ。ドイツやアメリカが20世紀初頭に自然体育や新体育などを打ち出して体育改革を行い、スポーツを学校体育に導入していったことに比べると、あまりにも立ち遅れていたといえるだろう。

それまでの旧ソビエト連邦下の学校体育は、基礎体力づくりと軍事訓練に終始した。7歳（現6歳）

---

9 小田切毅一『アメリカスポーツの文化史』不味堂出版 P. 302

から60歳（女子は55歳）までの全国民に対して課せられた定期的な体力検定試験であるゲーテオー検定が導入されたのは、1934年である。ゲーテオーの意味は「労働と軍事に備えて」である。義務教育年齢の子どもについては、ゲーテオーに備えた体力づくりや技術の取得を学校体育の場で行い、やがてはゲーテオー自体も学校体育で行っていくことになる。このような状態の中では、体育教育は全てゲーテオーのためのものとなる。ゲーテオーの実施項目には手榴弾投げやライフル射撃などもあり、他国以上に学校体育が軍事訓練の場となっていたことは間違いない。

学校体育は本来の目的である「子どもの成長発達を促し、心身の調和を図る」ということをおろそかにし、体育教師はいつもゲーテオーへのノルマに追われた。ゲーテオーに優秀な成績を残す子どもが多ければ、よい体育教師となる。「ゲーテオー＝学校体育」という時代が、驚くべきことに1985年まで約50年も継続されたのである。

一方で旧ソ連はスポーツを、国威高揚政策として用いたため、ソビエト式スポーツ英才教育を生み出す。このように、旧ソ連体制の中では、学校体育は体力づくりと軍事訓練、スポーツは任意スポーツ団体などで行う英才教育と、役割がはっきりと分かれていたのである。

しかし、社会情勢や労働の内容が変わるにつれ、これらも見直しを図ることになった。21世紀の高度科学技術社会・高度情報化社会を見据えたうえで、Y. サビーロフは「精神や神経の著しい緊張に抵抗し、疲労におそわれなためには、立派な身体的準備ができていくという条件がととのっている場合にのみ可能である」<sup>10</sup>とし、体育の意義や役割の重要性を説いた。このような見解の中で、学校体育の改革が行われたのである。

その改定案には、ゲーテオー検定を改定しゲーテオーの準備にのみ費やされた学校体育を解放することや、学校での運動部活動の充実、画一的判断のためのテストではなく、個々の子どもの発達や調和の状態を知って指導に生かすためのテストを行うことなどが盛り込まれた。

しかし、それには課題があった。第1に、施設・設備の未整備が挙げられる。さらに、学校体育・スポーツ用具の不足も深刻な問題であった。第2に、体育教師の絶対数の不足である。加えて、新しい体育教育の方針に見合った指導力を持つ教師を養成することが急務となった。

それらのハード面での諸問題を解決しつつ、ソフト面では「体育授業、体育関連授業にスポーツ活動を導入するとともに、学校間のスポーツ試合を増やし、学生のスポーツへの動機付けを強める」<sup>11</sup>ような改革がなされていった。ソ連崩壊後も、この体育改革政策は継承されている。

## 第二節 フランスの体育教育

フランスの体育教育は、ドイツのそれと同じく、ゆっくりと成熟してきた。他国と同じく、はじめに導入されたのは、労働や軍事における体力づくりや生産性の向上などのためであった。そして、ジムナスティックが導入され、個人の体を鍛えるための体操が体育であった。

しかし、ここでフランスの体育史上欠かすことができない人物が登場する。クーベルタンである。クーベルタンは、近代オリンピック競技会を立ち上げた人物として有名だが、それ以前にスポーツによって社会改革を実現しようとしていた。イギリスに渡った際、現地のパブリックスクールで教育の

---

10 里見悦郎『新ロシアスポーツ研究』不味堂出版 P. 317

11 同注10 P. 318

中心にスポーツが用いられ、それが達成や競争、チームワークやフェアプレイ精神などさまざまな教育的効果を上げているのを見て感銘を受けた。そして、スポーツに「肉体的道徳的社会的役割」<sup>12</sup>を担わせ、それまでのフランスの伝統的な教育を変え、優秀な人材を育成し、社会改革をしようと考えた。

それまでのフランスの教育は社会から隔絶され、学生は壁の中に閉じ込められていた。学習は知識の伝達でしかなく、学生が自由に授業を選択したり、自主的な活動を行ったりする機会はほとんどなかった。それは、現在の日本の教育にもいえることだろう。

ところが、イギリスでは自由だった。街中にあるパブリックスクールの「起床の鐘で生徒を起こすような強制的なやり方を避け、一人一人に個室を与え、朝の学業の開始時間だけを決めておく」<sup>13</sup>のような自由さは、当時のフランスにはなかったものであった。クーベルタンは、この自由さとスポーツの厳しい訓練や競技性がイギリスの教育の中で大きな効果を上げているとした。スポーツによって、「進取、大胆、決断、自信などの人格を形作るのだ」<sup>14</sup>とし、スポーツをフランスの教育に持ち込むことでのみ、教育、そして社会の改革ができるのだと主張した。

それまで学校体育の現場では、アモロス式ジムナスティックがもっぱら取り入れられていたが、デムニーは運動解析によって動作の原理を克服しようとし、ティッシュは生理学・解剖学・衛生学に基づいたスウェーデンのジムナスティック（いわゆるスウェーデン体操）を広めようとした。そこにクーベルタンの思想が加わり、スポーツか、スウェーデンジムナスティックか、あるいはエベールの推奨する自然体育（メトード・ナチュレル）か、という三者に分かれた論争が繰り広げられた時期があった。

しかし、クーベルタンは何も、学校体育からジムナスティックを排除しようとしたわけではなく、彼自身も「実用的ジムナスティック」を考案している。また、体育の方法論としてスポーツを取り入れることを推奨したわけでもない。クーベルタンにとってスポーツを教育の場に取り入れることは社会改革のための方法であったが、その性質上、必然的に体育という場に論争が持ち込まれるのは仕方のないことだっただろう。

この後、フランスでは、学校のみならず国民の大切な余暇活動としてスポーツを取り入れる施策がとられるが、第二次世界大戦の折にドイツの占領下に置かれ、体育の方法も変わっていく。ドイツに占領されなかった自由地帯では、それまでの世俗教育主義を廃するため、メトード・ナチュレルや矯正的ジムナスティックなどを義務化した体育・スポーツ教育をはじめ、遊戯や戸外活動、生活訓練、救急法などを盛り込んだ合科教育的なものとなっていった。このように、体育は教育のきわめて重要な位置を占めるようになっていった。

強制的に行われたメトード・ナチュレルや「大衆の生活に立脚しない総合教育の名による国民精神の作興」<sup>15</sup>などは戦後に撤廃されたが、現在のフランスにおける体育教育は、こういったことが基礎になっている。

### 第三節 社会主義国と資本主義国、そして日本における考え方の相違

社会主義国におけるスポーツは、旧ソ連をはじめ中国・東欧諸国においても、国威高揚政策の一環

---

12 清水重勇『フランス近代体育史研究序説』不味堂出版 P. 181

13 同注12 P. 180

14 同注12 P. 181

15 同注12 P. 270

であったため、能力の高い一部のアスリートには幼児期からスポーツ英才教育が施されてきたが、学校体育は長い間、軍事教育の一環であった。東欧諸国における体育教育は、旧東ドイツに滞在した帰国子女の話<sup>16</sup>によると、日本よりも生真面目な体育の授業が行われていたという。個人競技が多く、ボールゲームなどは遊戯の一環と見られて少なかった。これは、旧ソ連のゲーテオーにつながる考え方で、基礎体力づくりに重点を置いていると見ることができる。また、一定の時間内にどれだけ上達したかが評価の対象となり、上達する方法を教えることが主眼となっていた。これは、国民全体を一定のレベルに引き上げるだけでなく、そこから能力のあるものを見出し、スポーツエリートとして育てる政治がらみの考え方だといえよう。

世界で残っている最大の社会主義国である中国では、「国家体育鍛錬標準条例」に沿った細やかな指導計画と達成目標がある。試験があり、それに合格すれば合格証とバッジが交付される。<sup>17</sup> その内容は、短距離走や長距離走、走り高跳びや走り幅跳びなどの陸上種目、水泳などに加えて、手榴弾投げや行軍などもあり、<sup>18</sup> さながら旧ソ連で行われていたゲーテオーである。現在も社会主義国を保っている国家では、未だに体力づくりや軍事訓練に主眼を置いていることがわかる。

戦前においては、多くの資本主義国の体育もそうであったが、現在の日本の体育には、その性格が一部残っているといえよう。目標はさることながら、現在の日本における体育の時間は、「先生の言うことを聞く時間」<sup>19</sup> であり「従順でおとなしい人間をつくる」<sup>20</sup> ことになっている。教師に決められた課題をこなし、全員がある目標を達成するために同じように活動する。そこには個人における身体能力の差は考慮されていない。達成目標が大きく掲げられた日本の体育は、ジムナスティックやトゥルネンにおいて、そろった指先やつま先を求めてきた近代の欧州における体育そのものだ。

では、欧米の授業を見てみよう。そのカリキュラムは先に述べた。体育の授業は「お遊びのような授業」<sup>21</sup> で、「運動不足解消と気分転換のために体を動かし、大声を出して楽しんでいた」<sup>22</sup> といったような体験談を語る日本の子ども達が非常に多い。さらに「強制する」ということが少なかった<sup>23</sup> 「いろいろなスポーツに挑戦できます」<sup>24</sup> 「本人の意志が尊重される」<sup>25</sup> 「あまり細かな技術やルールといったものは重要視していなかった」<sup>26</sup> という声があった。

もちろん、体力的に厳しい種目を授業に取り入れている学校もある。もくもくと体力づくりをするような種目は、あまり楽しい雰囲気にはできないものだが、そのような種目であっても、トライアスロンにしたり生徒の喜ぶごほうび（大統領のサイン入り賞状など）を提示したりして、子どもの興味や関心を引く工夫がされている。さらに体育教師のかもしれない出す雰囲気も重要だ。生徒が教師に自由に意見

---

16 同注5 P.62~65

17 笹島恒輔『中国の体育・スポーツ史』ベースボール・マガジン社 P.178~181

18 同注17 P.180 表23

19 「体育科教育」2003年1月号 [対談] 体育・スポーツ、どこへ行くのか？（玉木正之・友添秀則）大修館書店 [http://www.taishukan.co.jp/magazine/taiiku/taidan\\_0301\\_2.html](http://www.taishukan.co.jp/magazine/taiiku/taidan_0301_2.html)

20 同注19

21 同注5 P.133

22 同注5 P.149

23 同注5 P.61

24 同注5 P.91

25 同注5 P.91

26 同注5 P.154



が言えたり、疲れたら休憩したり、一緒に笑いあったり励ましあったりして、楽しく授業が進んでいる様子がうかがえる。

また、評価も、出席率や取り組みの真面目さ、達成目標ではなく個人の能力のアップの仕方などによって与えられる。身体能力・技術の高さや体力が評価の対象になることは少ない。

これは、このような考えを持つ多くの国では学校以外のスポーツが盛んであり、体育の授業において体力や技術を磨かなくても、高い技術や体力のある子どもが少なくないという環境にも起因しているだろう。しかし、何よりも大きいのは、その目的のあり方ではないだろうか。「自分に合った、自分が楽しめるスポーツを探す」<sup>27</sup> ことを目的とし、興味や関心、将来的なスポーツへの動機付けを重要視しているからだろう。現在では、旧社会主義国家でも、民主化が進むにつれてそのような目的に変わってきている。

日本の体育は、健康や体力づくりへの、将来も含めて、興味、関心、習慣を身につけさせることを目標としている割に細かい達成目標を設定しており、教師はそれをこなすことに追われる。その結果、結果重視、勝利至上主義が生まれ、体育嫌いの子どもを育ててしまう。日本の体育は、もっと根本的に授業のあり方を改めるべきであると考えられる。

### 第三章 スポーツと教育学の新たな展開

#### 第一節 スポーツ教育学という考え

フランスのクーベルタンが用いた理論は、後に『スポーツ (le sport) 教育学』としてクーベルタン自身がまとめている。人間の全人的な成長発達はスポーツを用いた教育がもっとも効果的であるといった考えの下に、スポーツの普及、大衆化、国際化を試みてきた。その中でクーベルタンが突き当たった壁は、スポーツにおける「商業主義」「勝利至上主義」であった。それは、教育とは反対のベクトルを持つものであったため、クーベルタンはアマチュアリズムを主張する。近代オリンピック競技会の創立もまた、フランス国内でスポーツの大衆化を試みた結果が思わしくなかったため、先に国際化を意図したものである。

2012年にも行われたオリンピック競技会というスポーツの祭典は、クーベルタンの社会改革の1つの手段であった。クーベルタンは、世界は個々の国の集合体ではなく、もともと世界という大きなカテゴリーが存在する中でそれを国という分類で細分化したものであるという認識を持ち、同じ人間同士がスポーツを通じてそれを再認識しながら、己の中に世界を見出すという精神の基にオリンピック競技会を開催した。この考えを「オリंपィズム」と呼ぶ。

こういった考えを包括し、スポーツの歴史・技術・道徳的社会的価値という3つの柱を中心に、スポーツによって人をよりよい方向に教育するのが、スポーツ教育学である。彼は、それまで分けて考えられていた身体と心を融合して考えていることが見て取れる。それは医学的・生理学的な個体としての肉体ではなく、人の意思や知というものが反映された身体であり、それを彼はあえて「筋肉」と呼んでいる。そして、この理論は、20世紀における現象学——身体や運動という概念を人間存在と世界との媒介として重視する——に包括されていった。

しかしその後、クーベルタンの考えから離れて、スポーツは無方向に成長、肥大化していった。そ

---

27 同注5 P.114

れを、哲学の発展を踏まえて再構築したのが、ドイツのグルーベ（1930～）である。グルーベは、スポーツ教育学を次のように定義している。

スポーツ教育学は、トレーニング学、運動学、スポーツ医学、スポーツ心理学、スポーツ社会学、あるいはスポーツ史とならんで、スポーツ科学における独自の専門科学であり、スポーツのなかの教育と陶冶とスポーツによる教育と陶冶についての理論と実践を含んでいる。<sup>28</sup>

スポーツ教育学は人間学が重要な基礎となる。身体を「生きられた身体」「媒体としての身体」「社会的産物としての身体」という3つの視点でとらえ直し、「経験的・分析的な方向と規範的な方向の両面をもっている」<sup>29</sup>として、経験や実践の中で見出した分析をもとに、「あるがまま」だけではなく「あるべき」という方向性を示した。つまり、無方向に肥大してきたスポーツの舵取りをする理論を打ち上げたのである。

グルーベの言う「スポーツ」は、それまでのトゥルネンやジムナスティックなども含んだ広義の身体活動である。そして、学校スポーツのみならず、クラブスポーツやそれ以外のスポーツにも及んでいる。

## 第二節 スポーツ学と体育の相違

ドイツでは、1972年の「学校スポーツ行動計画」以降、体育は「学校スポーツ」「スポーツ授業」と改められた。そこで何が変わったのだろうか。

それまでのドイツの体育授業は、教育と陶冶が行われる場であった。教育的に選ばれた題材によって「おおむねプレイすること、形成すること、練習すること、達成すること、競い合うこと」<sup>30</sup>によって基本形態を学ぶべきであり、その中に「陶冶されるべき内容」が含まれていなければならないというのが、体育の根本的な考えであった。

しかし、現在では、それよりも直接的な経験を重視している。スポーツ教育学における学校スポーツでは、学習理論やカリキュラム理論的なアプローチが採用された。何を学ぶのか、何を指導するのか、といったことよりも、身体的・物質的・社会的な経験を直接的に得られるのがスポーツであり、これは個人的な発達のみならず、将来的な健康と癒しにつながっていくという考え方である。

加えて、理論学習の重要性も説いている。グルーベは、以下のように述べている。

子どもや青少年を現実社会および今後の展開に備えさせ、さらに才能に目覚めさせ、資質を十分に発揮させることは、学校の重要な課題に含まれるゆえに、スポーツにはそれにふさわしい場が確保されなければならない。「現実社会」のなかでのスポーツは、経験され体験されるだけでなく学習されるべきでもある。<sup>31</sup>

スポーツ教育学においては、学習することにも重点を置いている。クーベルタンのスポーツ教育学の3つの柱にもスポーツの歴史や技術が含まれ、経験的体験的には取得できない歴史や、技術の学習が盛り込まれている。さらにスポーツ授業においては、「職業準備的な資質としてスポーツに関する

---

28 同注7 P. 74

29 同注7 P. 74

30 同注7 P. 174

31 同注7 P. 176

知識や能力のための基礎をつくらねばならない」<sup>32</sup> とある。

ところが、日本の体育ではその点がおろそかにされ、個人の経験にゆだねられている。小学生であっても、もっと早く走るにはどうしたらいいのか、そのためにどのようなトレーニングをしたらいいのか、といったことを知りたいだろうし、それを実現できて自分がステップアップすれば、体を動かすことがもっと楽しくなってくる。そういった学びが、現在の体育にはほとんど見当たらない。

さらに、小学生どころか、中学生になってもどの内臓がどこにあるのか、筋肉や骨がどのようなようになっていて、どう動かせば効率的に目的を達することができるのかといったようなことを知らない。スポーツの歴史やルールも知らないまま、なんとなく練習をして、なんとなくプレイに入る。体やスポーツの理論的な部分は置き去りにされている。また、これだけ安全神話が崩れてきているにもかかわらず、セルフ・ディフェンスや救急法、ストレスマネジメントなどの実社会に出てから必要な教育もほとんどない。スポーツ教育学は、今までの体育にはない、そういった理論的アプローチも網羅しているのである。

スポーツ教育学は、身体と精神との融合であり、道徳的社会的教育である。さらに、知的分野も担う。保健はもちろん、筋肉をつけるための栄養素はたんぱく質で、などという家庭科の栄養学の分野や、社会（歴史・公民）、理科（生物）などとも密接に関係してくる体験的総合健康学習なのである。

このようなスポーツ学を学校体育に取り入れるための具体案として、玉木は「体を動かすこと」「身体の生理（保健）」「スポーツの歴史」をそれぞれ3分の1ずつ行い、「スポーツの歴史」については社会科の「歴史」「公民」などとの合科教育にすることを提唱している。<sup>33</sup>

### 第三節 スポーツ学から得られるもの

日本の小学校では、多くが体育の冬季のカリキュラムに縄跳びを取り入れるが、一人一人に「縄跳びカード」を配り、そこには回数や技におけるランク付けが明確にされている。クリアした技と回数の交差しているところに色を塗る。当然、難易度の高い技を多くの回数跳べた身体能力の高い子どものカードは、見事に着色される。それが、時にクラスの中で発表され、賞賛される。

一方で、努力しているにもかかわらずクリアできない子どもは、色付けができない。目標が達成できない子どもは、当然ながら成績にも反映されない。努力は実を結ばないのだと学び、意欲を失っていく。このように画一的で平面的なのが、現在の日本における体育であり、教育なのである。体育における競技も勝ち負けにこだわりすぎるきらいが見え、最近では全く勝敗をなくすという暴挙に出ている。これも「負け＝ダメ」といった平面的な発想を超えられないために起こったことだ。

しかし、スポーツ教育学は、もっと多面的に立体的に物事をとらえることを教えることを可能にする。縄跳びをするなら、まずは好きなように跳ばせてみる。ゆっくり跳ぶ、早く跳ぶ、1人で跳ぶ、2人で跳ぶ、数人で跳ぶなど、自由に楽しませてよい。その中で、ユニークな跳び方を発見した子どもがいたら、それを紹介する。時には教師が、「こんな跳び方もあるよ」と見本を見せる。試してみる子もいるだろうし、試さない子がいてもいい。自分なりの跳び方を発見しようと躍起になる子どももいるだろう。1つの技をうまくたくさん跳べるようにする子どももいるだろう。

---

32 同注7 P.177

33 同注19

評価は、ユニークな跳び方を見つけた子ども、たくさん跳べる子ども、さまざまな技ができる子どもに限らず、熱心に取り組んでいたり、楽しんで取り組んだり、できないことができるようになった場合にも与えるべきだ。縄跳びカードなど必要ない。

そうすることで、今までよりさらに多くの子どもが意欲的に取り組み、体力や能力の向上、楽しみや癒しも図れる。友達と技を教えあったり、数人で跳ぶことを工夫したりしているうちに、助け合いやチームワークなども生まれてくるだろう。楽しみや喜びを感じたら、わざわざ「縄跳びの練習」を宿題にしなくても、自発的に戸外遊びに縄跳びを取り入れていく。技や回数を達成するよりも、子どもにとってはるかに有意義な縄跳び授業が行えるはずだ。こういったやり方が、スポーツ教育学の具体的な授業方法であると考えられる。

縄跳びを例に挙げたが、それだけではなく種目も自由に選択できればもっと良い。自由にスポーツの経験をさせ、その楽しみを見出し、発達を促して身体能力をアップし、将来的な健康への興味や関心、習慣を身につけていくのが、スポーツ教育学なのである。

さらに、スポーツ教育学は、スポーツ分野における知的能力の育成も行う。能力をアップするための健康管理やトレーニングの方法を授業に盛り込むことによって、もっと多くの有能なアスリートを生み出す土壌ができる。そうでなくても、健康的な生活への知識は必要だ。健康ブームが起こり、健康情報を発信する番組の視聴率はきわめて高いが、そこには間違った健康知識も含まれており、それに起因する体調不良などの弊害も生まれている。しかし、正しい知識をきちんと学校で学べば、そのようなことを防げる。

そこから得られるものは、健康・スポーツへの興味や関心だけではない。子どもたちの内面のもっと深いところに働きかけて、自尊心や自信、意欲を引き出す。それは、他の教科や生活全般につながり、全ての活動が自主的かつ意欲的になる。自尊心が育つと、自分や他者を大切にしようという思いが生まれる。当然、健康への関心も高まるし、他者の個性の尊重ができ、心にゆとりが持て、思いやりもはぐくまれる。体力的なことだけではなく、知的にも精神的にも発達成長を促すことができるのだ。現在、日本の子どもたちには「生きる力」が不足しているといわれるが、それを補うことができるのがスポーツ教育学であるといったら言い過ぎだろうか。

全人的な発達を促し、スポーツを学び、楽しみ、将来的に健康を保つための興味や関心を担うという意味では、現在の体育の目標をクリアできるのは、体育ではなくスポーツ教育学だろう。

## おわりに

欧米をはじめ、世界各国の学校体育の実施内容を分類すると、大まかに2つに分かれる。達成目標を持ち、全員をそのレベルに引き上げようとする内容と、おおらかに自由にスポーツを楽しませるといった内容だ。前者は体育、後者はスポーツ教育学に当たる。

前者は、軍国主義の国や社会主義の国に多く、社会情勢が不安定な国は、未だにそのやり方を続けている。資本主義国であっても戦前にはそのような方法が取り入れられた。その目的は、国民の体力の増強と能力の育成、そして、命令に従う従順さだろう。学校体育は、従順で頑強な兵士や、機転が利く優秀な将校を作るために利用されてきた、まさに国家のための体育だったのである。

後者は、国内情勢が比較的安定している資本主義国に多い。体育ではなくスポーツ授業に名を変え、数種の種目から自由にやりたいことを選択できたり、シーズンによって選択を変えることができたり

する。基礎練習などはほとんどないままにゲームを行う。体を動かすことが楽しい、という気持ちを子どもに喚起させ、能力の育成よりもスポーツへの動機付けや将来の健康的な生活を最大の目標にしている。

では、日本の学校体育はどうだろうか。日本では、体育の目標に「健康への興味、関心、将来的な健康生活への基礎作り」などを盛り込んでいるにもかかわらず、実際には興味や関心を失わせる授業も少なくない。達成目標が細やかに指導要領の中に盛り込まれている数少ない国が日本だという。目標としているところで見ると後者だが、実際の授業で先の分類に含めるなら前者に当たる。

授業は、子どもの興味や関心を引き出すよりも、むしろ能力達成が重要視されている。全員が同じことを一定以上のレベルに達することが大切にされ、規則を守り、従順でおとなしい子どもを育てようとしている。帰国子女の体育授業の体験談の中に、生徒をバカ呼ばわりしたり、水着のまま校庭を走らせたり、1時間中整列の練習をさせたり、といった日本の体育教師が登場する<sup>34</sup>が、これで果たして体育の目標が達成できるのだろうか。

体育に子どもの全人的な発達を期待するなら、後者のスポーツ教育学を採用するべきだ。そこで得られるものは、スポーツの楽しさを通じて健康への興味、関心を引き出すだけでなく、自主自立の精神や知的発達、自分や他者の個性の尊重など計り知れない。勝利至上主義や結果重視の画一的平面的考え方も多角的になり、たとえゲームに勝敗があっても、「それが嫌だからやりたくない」といった劣等感を持たずにすむだろうし、それでもやりたくなければ、参加しない自由、見学する自由が保障されてもいいのではないか。そうすれば、徒競走においてゴール前で手をつないで一緒にゴールインするなどというこっけいな運動会シーンを目にすることもなくなるだろう。

日本も「個性の時代」といわれて久しい。しかし、実際に行われているのは没個性の教育である。「みんなちがって、みんないい」を実現し、ストレス社会を緩和するためにも、体育にはスポーツ教育学を取り入れることを、私は強く推奨したい。

#### 〈引用・参考文献・資料〉

- ・三省堂 エクシード英和辞典
- ・小学校学習指導要領 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/990301b/990301j.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301b/990301j.htm)
- ・和田雅史 1994『子どもが見た世界の体育授業』大修館書店
- ・オモーフ・グルーペ/ミハエル・クリューガー 2000『スポーツと教育 ドイツ・スポーツ教育学への誘い』ベースボール・マガジン社
- ・小田切毅一 1991『アメリカスポーツの文化史』不味堂出版
- ・里見悦郎 1997『新ロシアスポーツ研究』不味堂出版
- ・清水重勇 1986『フランス近代体育史研究序説』不味堂出版
- ・笹島恒輔 1987『中国の体育・スポーツ史』ベースボール・マガジン社
- ・「体育科教育」2003年1月号 [対談] 体育・スポーツ、どこへ行くのか？（玉木正之・友添秀則）大修館書店 [http://www.taishukan.co.jp/magazine/taiiku/taidan\\_0301\\_2.html](http://www.taishukan.co.jp/magazine/taiiku/taidan_0301_2.html)

(とみもと やすし 初等教育学科)